

私の著書には、私のすべての情報や調査結果を掲載しているわけではない。

以下において、いくつかの節を補足または解説したい。

1. リヒャルト・シュトラウス「英雄の生涯」について
2. 「シュピーゲル」誌に公開のチェリビダッケ宛の手紙
3. 1959年、デッカ・レコード社との話し合い
4. 挿話および逸話
5. シュトゥットガルトでの終わり
6. ウラジーミル・フェドセーエフ
7. 初期の記事
8. 1974年、バイロイト
9. 2008年、イタリア放送協会でのカルロス・クライバー

英雄の生涯

467—469 ページおよび 447—450 ページへの補足

1993年に、クライバーはウィーンで、リヒャルト・シュトラウスの「英雄の生涯」を指揮した。数年後になっても彼はこの作品に没頭していた。この曲を解釈するに当たって、彼が特に気にかけていたのは何か、以下の節で解き明かしている。

ジビレ・ヴェルナーは、1994年までニューヨークのフィルハーモニア・オーケストラの指揮者長を務め、その後ヨーロッパで客演の指揮を多数行った後、1998年からニューヨーク・シンフォニック・アーツ・アンサンブルで、指揮者長を務めた。彼女は同業者として、また崇拜者として、クライバーとさらに親しく知り合いになりたかった。彼女は1990年にニューヨークで、「ばらの騎士」のあるリハーサル後のクライバーに、路上で話しかけたことがある。それから彼女はクライバーに、「英雄の生涯」についてあるいは話し合う気があるか、書き送った。アマチュア音楽家とのチャリティ・コンサートで、彼女もこれを指揮していたからである。彼女はこのコンサートのテープを彼に送った。

何日も経たないうちに、彼女は彼の返事を受け取った。彼女の話では、「彼はたぶん、初めはテープに耳を傾けずに私に返事を書いたのでしょう。でもそれからテープを真剣に聴いて、また手紙の封を切って意見を付け足したようです。」この話には、ある種のおかしみがなくはない。ジビレ・ヴェルナーと親交のあったヴァイオリニスト、レズリー・ヘラーは、メトロポリタン歌劇場のオーケストラでクライバーのことを知っていたが、1993年9月20日、クライバーはレズリーに、この出来事について手紙を書いた。彼女はジビレ・ヴェルナーの指揮する上述のコンサートで、「英雄の生涯」においてヴァイオリン・ソロを演奏しており、以前さらに、「ばらの騎士」の素晴らしい指揮に対して、クライバーに礼を述べていた。返事の中で彼はユーモアたっぷりに、初め全く耳を傾けたくなかったカセットテープの話をした。クライバーはレズリー・ヘラーの詩情ある感動的な演奏が気に入り、また彼は、彼女が作曲家にとって重要な関心事である表現の的を突いていたとしているが、その様も彼の気に入った。シュトラウスはヴァイオリン・ソロにおいて、その妻である歌手、パオリーネ・シュトラウス・デ・アーナの性格を描写していた。これを演奏において精神的に深めることが、クライバーにとっては、ヴァイオリン・ソロの解釈のために全く重要な要素であった。

したがって、ジビレ・ヴェルナーが受け取ったのは、クライバーの初めむしろ無愛想だった手紙ではなく、愛想のよい手紙だった。クライバーは手紙を喜んで何通も書いたが、個人的に誰かに会いたいとはまず思わず、会うことができないかという彼女の誘いを、申し訳なくも断った。彼が続きで手紙に付け加えた詳細には、彼がこの作品にいかにか集中して取り組んでいたかがうかがえる。ジビレ・ヴェルナーは、クライバーに彼女の勢いあるテンポを賞賛されたとき、喜んでいた。「後に、彼は私に手紙でこう書き送ったのです。ヴァイオリン・ソロは、いつも女性に演奏してほしいものです、しかも聴衆の心をすっかり魅了するように、レズリーの少なくとも半分は優れたヴァイオリニストに演奏してほしいものです、と。」

興味深いのは、「英雄の生涯」のためにいくつかアドバイスしてほしいという同業者ジビレ・ヴェルナーの要望に対して、クライバーが自発的に応じた様子である。しかし自らの指揮の楽譜をどのように洞察するかについては、彼は決して教えようとしなかった。それからクライバーは、資料、草稿、およびその誤りについて書いた。「彼が言うには、自分はこの曲をたった2回しか指揮していないわけだから、専門家ではない。しかし、作曲家自身だけがその録音において、彼にとってそのように重要なテンポを成し遂げるに至った、と悟ったことは明らかだと。」

チェリビダツケ宛の手紙

カルロス・クライバーは、「シュピーゲル」誌 1989 年（創刊 43 年目）5 月の 18 号に、セルジュ・チェリビダツケに宛てて公開の手紙を書いた。私の著書（452 ページ）では、抜粋においてのみ引用したものである。

「セルジュ様 ！

私たちは「シュピーゲル」誌で、あなたに関する記事を読みました。お苛立ちのようですが、私たちはあなたのことを寛大な目で見えております...。」

[このリンクで手紙の全文を読み直すことができる。](#)

チェリビダツケ宛の手紙

1959 年、デッカ・レコード社との話し合い

59 ページの補足

すでに 1959 年、デッカ・レコード社の音楽プロデューサーとして名のあったジョン・クルショーが、カルロス・クライバーを得ようと骨折ったことは、私の著書第 2 版で付け加えた。しかし、クライバーはこの時点で、そのような傑出したレコード会社のスタジオに入りたいと決断していなかった。小規模のレコード会社のために、仮名を使ってであったらそうしたのかどうかは、別問題である。

クルショーは当時、キャピタル・レコードのためにも短期間働いていた。結局成果は上がらなかったが、クラシック音楽部門を築こうとしたのである。そしておそらくは、新しいレコードレーベル向きに、やはり若い人材を求めていたのであろう。

あるいは彼は、ヴァリアントとも係わり合いがあったのであろう。ヴァリアントのレーベルにおいて、シュトラウスのワルツを収録したレコードが発売されたのである。そのレコードにおいては、フリッツ・クライバーとかいう誰にも知られていない人物が、ウィーン・フェスティバル・オーケストラを指揮した。これに関して詳細は、私の著書に記してある。

デッカ・レコード社に関してさらに詳しくは、以下の書において読み直すことができる。

ジョン・クルショー著「レコードを正す」1981年ロンドン、1982年再版

クルショーはこう書いている。

「カルロス・クライバーの件では、私は失敗した。LPの初期に彼の父は、デッカ・レコード社をクラシック音楽の地図に載せる役割を果たす、レコードの何枚か作ってくれたのだが。エーリヒ・クライバーは、彼の力でできる全てを尽くして、息子が指揮者にならないように努めたが、早くも1959年、その父の死の3年後には、カルロスが非凡な素質を見せているという噂が立っていた。1959年3月、ともにフランクフルト空港で乗り継ぎしようとしている時に、私は彼と打ち合わせの場を整えた。だが彼はレコーディングの見込みに関してははっきりとした態度を示さず、そんなわけで彼を追いかけても無駄だった。彼が曖昧で、バラ園が無関心ならば、全ては時間の無駄だった。」

挿話および逸話

400ページの補足

ドイツ・グラモフォン、1985年ハノーファーにて

1985年の挿話である。カルロス・クライバーが音響監督クラウス・ヒーマン、および録音監督ヴェルナー・マイヤーと、ドイツ・グラモフォンのために彼の録音の

CDデジタルリマスター作業をした際に、ハノーファー近郊のランゲンハーゲンにあるエミール・ベルリン・スタジオで仕事していた時のことである。

クライバーはハノーファーのインターコンティ・ホテルで眠っていた。突然、レコード会社の従業員たちは、クライバーのバスルームで、ある問題に直面しているのがわかった。浴槽が新しく、もはや古いものと同じ高さまで水がいっぱいにならなかった。水はある高さまでしか届かないまま、流れ出てしまったので、首まで水に浸かることができなかったのである。

ヒーマンは、スタジオの気分を妨げることが元で、クライバーが不機嫌になるのを味わった。「彼のお気に入りの日課は、指がしわだらけになるまで、午前中いっぱい浴槽に浸かることだった。しかし、浴槽がいつも半分しか満たされなかったので、そうはいかなかった。そこで彼は、チューインガムをたっぷりとかみ始め、それで排水管に栓をした。これで上手くいったのであるが、まったく別の問題を被ることになった。チューインガムが硬くなりすぎて、もう取れなくなってしまったのである。

我々チーム全員、これを解決するにはどうしたらよいか、考え抜いた。ある技術者が救いのアイデアを思いついた。コールドスプレーである。クライバーは運がよかった。」

224 ページの補足

「トリスタンとイゾルデ」、1973年ウィーンにて

トリスタン役のハンス・ホップフについて

初演の録音は、ホップフの弱点を証明する。しかし2年後、60歳になった時にも、「オペラ世界」誌のインタビューにおいて、彼には不平を言う理由が見当たらなかった。すなわち、「私には自分がまったく年取っていないように思われる。声に関しては、私の元気をすべて持ち合わせているとさえ感じる。トリスタン役をどのように割り当てるか、今はすでによくわかっているので、今日のトリスタン役は、私には前より上手くいっている。1974年10月に（原文のまま）、クライバーの息子さんの指揮で、ウィーンで1週間に3回、立て続けにトリスタン役を歌った...。」

それでもホップフは、この役に関する彼の問題について、あからさまに語った。すなわ

ち、「トリスタン役の構成はまったく良くない。ワーグナーだったら、この哀れな男クルヴェナルがもう一休みできるように、彼のために少なくとももう 2、3 楽章割いたところだったろうに。その際、イゾルデの方がはるかに良い。そもそも、こうした大きすぎる役を演じる時に最もひどいのは、こうだ。第 1 幕、第 2 幕を上手く歌うことができ、素晴らしい気分になる。それから、様子があやしいことに気づく。声が正しく出てくれなくなる。そして最後的一幕が上手くいかないと、不思議なことでもないが、それで聴衆はがっかりする。そこですぐれた技術がないと、つまりしっかり歌い、自分を強いて、体を支える技術、それが必要なのだが、そうした技術がないと、助ける神はいない。歌が失敗し、時間の無駄になってしまう...。」

(「ハンス・ホッフとの対談」、「オペラ世界」誌、1976 年 8 号)

客演をめぐる逸話

— 可笑しかったのが、カルロス・クライバーのホテルで混乱を巻き起こした、燕尾服 3 着をめぐる挿話である。すなわち、「トリスタンとイゾルデ」の上演のために、クライバーは燕尾服が 3 着必要だった。汗が染みたので、彼はそれから 3 着ともクリーニングに出した。次の上演の前に、燕尾服が箆箆に予め見つからなかったとき、お邪魔したくなかったので、と説明する人がいた。

クライバーはこう言った。燕尾服を部屋のドアの前に用意しておいてほしい、上演の前に休みたいので、と。しかし、ホテルのボーイは厚意を持ちすぎて、ドアをノックした。クライバーは起きて、クリーニングしたばかりの燕尾服をつかんで、窓の外へ投げてしまった。別の燕尾服を用意しなければならなくなった。

— クライバーは、ウィーンでの初演の祝典にあまりにも腹が立ち、夜通しホテルの彼のバスルームで熱湯を流していた。朝、ホテルの貯水タンクが空になってしまった。もう誰も熱湯が手に入らなくなった。クライバーは子どものように喜んだ。

同様の出来事は、ハンノ・リンケがその著書「ぼろぼろ」で描写している。(ヨローッパ出版所 (EVA))

ベルリン、1975 年 12 月

「昼、私は必要に迫られて、カルロス・クライバー、エーファ・ワグナーと一緒にいた。場所はシュヴァイツァーホーフ、インターコンティの向かい側、かつてはヒルトンだった。料理はおいしく、雰囲気は悪い。クライバーはいつものように風変わりな態度で、ミケランジェリが怖いのだ、と主張した。彼がただ自慢していたのは、先月インペリアル・ホテルで夜通し熱湯を流して、朝お客たちが、温かい洗い水が出ないと苦情を言っていたことである。

エーファ・ワグナーは、野心的に赦すように微笑んだ。あるいは彼女の曾祖父のことを考えていたのかもしれない。デザートの後、私は飛行機で出発した。後にクライバーはミケランジェリを、彼がベートーヴェンに対して行ったことで訴えたいと思った。クライバーがカールスルーエ（の連邦裁判所）まで行くのを誰が妨げたのか、私にはわからない。そんなことをやってのけた人間は決していないだろう。

「ばらの騎士」、ミュンヘンにて

クライバーは邪魔されたとき、時々怒って反応したとはいえ、あのようには愛想よく、好意的なこともあった。あるファンがこれを経験した。ミュンヘンでの「ばらの騎士」の上演後、その音楽を堪能した後で、そのファンがさらにサインをせしめようと思った時のことである。

彼はクライバーの部屋へ出向いて、思い切ってノックした。しかしクライバーが開けたとき、そのファンの男性は驚いてドアに立ち尽くした。というのも、この名指揮者がパンツ姿で目の前に立っていたからである。クライバーはしかし、このサインあさりの男性が思わず恐れたのと裏腹に、決して怒って追い返したりせず、この人がお願いを持ち出して、クライバーの素晴らしい演奏の礼を述べるのに、好意的に耳を傾けていた。クライバーは打ち解けてこの人を中へ招き入れ、机に着いて彼の望みをかなえてくれたのである。

突然一人の女性が、この名指揮者のビールを持って来合わせ、彼がみずぼらしい服装で見知らぬ男と一緒にいるのが見えた。そこで驚いて叫んだ。「まあ、あなたは主人と何をなさっているのですか。」しかし、彼女の驚きは穏やかな微笑みに取って代わり、その男がサインをもらって、「あなた方のことを決して忘れません。」と心から礼を述べたとき、彼女はこう答えた。「私たちもあなたのことを忘れません。」

「こうもり」、1974年ミュンヘンにて

クライバーは人生とシャンパンをまったく愛した。悪しざまに言う人々が騒ぎ立てたように、彼が時々シャンパンに入り浸ったかどうかは疑わしい。セクト酒とシャンパンとを、彼は非常によく区別できた。大晦日、合唱団に何か良いこととしてあげようと思ったとき、彼は本物のシャンパンを注文した。小道具の男性が普通のセクト酒を持って来て、クライバーがこのお金を持っていってくれというように、「まあ、彼らは気がつかないから。」と言って、お金を手に押し込もうとしたとき、その男性はクライバーにさらに好意を示そうと思った。これを見ていたある女性の証言では、クライバーはその後で、この男性を「危うく絞め殺すところ」だったそうだ。

シュトゥットガルトでの終わり

クライバーのシュトゥットガルトとの関係が、最終段階で決裂していたことは、私の著書で詳述した。その補足として、クライバーが実際には、何年にもわたる音楽上の好機と、シュトゥットガルトのはるか外にも及ぶ文化の輝きを、この都市に贈ったことを示唆する意味深長な引用が、ミヒャエル・シュトロベールのセルジュ・チェリビダッケに関する以下の文献中の寄稿にある。

バーデン＝ヴュルテンベルク州年鑑 2006 年第 13 巻のうち、音楽の部

(開く)

ウラジーミル・フェドセーエフとカルロス・クライバー

ロシアの指揮者ウラジーミル・フェドセーエフとは、2006年7月に話をした。彼がクライバーを個人的にも非常に評価しており、クライバーと私的に連絡を取っていたことを知っていたからである。フェドセーエフはクライバーを天才的な指揮者と見ており、クライバーがロシアの音楽に興味を持っているのを喜んだ。フェドセーエフは、自国でクライバ

ーがオーケストラの楽譜台に立つところを見たかったが、ロシアで指揮するようにクライバーの心を熱くすることは、彼にもできなかった。

これに関して、この名指揮者のホームページ上で、私の著書から抜粋されている。
([ページを開く](#))

別のインタビューにおいて、フェドセーエフはクライバーについて、上記のような考えを述べている。

指揮の技術において、あなたの模範の役を果たすことができるのは誰ですか。

カルロス・クライバー氏です。傑出した指揮者、素晴らしい音楽家、偉大な人物です。どんな「伝説」が氏について語られなかったことか。すべてあまりにも馬鹿馬鹿しい。この人物を理解する鍵は、音楽に対するその途方もない責任です。それとその逸脱ぶりです。創作の終わりは人生の終わりをも意味したので、無言で、寂しかったのです。破壊的で騒々しい傾向に対して、彼は自己主張したいとは思わず、また自己主張できなかったのです。彼の晩年に初めて知り合ったのでその期間は短かったけれども、私は彼と知り合えて誇りに思い、手紙での彼の率直さを誇りに思います。彼が生きて創造的な活動をしてくれたので、私は幸せです。そして私の心の中に、また私の命の中に、彼は永遠にいるのです。

[「名指揮者フェドセーエフへの 12 の質問」](#) を見る。

カルロス・クライバー — 初期の記事

カルロス・クライバーについては、彼が国際的に熱望され称賛される楽譜台のスターになったとき、雑誌や新聞に数え切れない寄稿が掲載された。

しかしすでに子どもの頃、著名な父親の息子として、彼は公衆の関心を引き起こした。おそらく最も知られているのは、父と一緒に写った 1931 年に現像された一連の写真であろう。ブリキのドラムを父の膝の上に乘せた幼いカールの写真は、1931 年から 1932 年に、

街頭記事を通して広まった（貴婦人、7日間）。私が特に嬉しかったのは、エンパイア・ステート・ビルディングの上にいる4歳のカルロスの写真で、忘れていたのを調査中に見つけ出し、著書の写真部分に掲載できたことである。

やはり興味深いのは、1935年または1936年の写真で、カルロス・クライバーが幼いイーゴリ・キプニスと一緒に、少し恥ずかしそうにカメラを覗き込んでいるところである。おそらく公表されていないこの写真は、技術上の理由から、残念ながら私のホームページにしか使用できなかった。

その後、1959年から1960年にかけての客演まで、クライバーの息子をめぐって状況は静かになり、折に触れて父に関する記事で言及された。ここに掲載した「ミュンヘン・メルクリウス」紙の1955年春の寄稿がその例である。この寄稿では、エーリヒ・クライバーが東ベルリンと別れたことを取り上げている。

クライバーは妻とともにケルンに赴いたが、その行動がどれほど不意であったか。それは彼が、常住していたホテル・アドロンのある東ベルリンに、彼の個人的な全財産を残してきたからでもある。ポツダムのハンス・オットー劇場で第2楽長であった彼の息子も、その間父について行った。これを機に知られたことだが、クライバー自ら、同国立歌劇場と契約を結ばなかった。これ以上、契約により拘束されたくなかったからである。彼が東ベルリンの国立歌劇場のもとにとどまると、繰り返し強調していたので、契約を強いられることも一度もなかった。フィルハーモニー管弦楽団のもとで、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーの後任に就かないかという、西ベルリンの惜しみない申し出すら、彼は拒否していた。クライバーが国立歌劇場に雇い入れた西ベルリン出身の芸術家たちは、国立歌劇場との契約を守りたいと思っている。

1954年秋の「夕刊ミュンヘン」の短信は、カルロスが東ベルリンへ向かったことをつぶさに見ており、短い記事ではあるが、多少の時代的な音色を伝えている。

指揮者エーリヒ・クライバー氏の息子、カルロス・クライバー氏は水曜日の午後、ミュンヘンからベルリンに向けて旅立った。バイエルン国立歌劇場のコレペティートルである。フリードリヒ・W・シュルツ氏とその夫人は、クライバー氏とその多くの小荷物をDKW（「蒸気自動車」）で駅へ送った。

カルロス・クライバー

若者たちの演壇

12月7日、本シリーズ放送の第22回コンサートが開かれた。録音は20時に超短波で、北ドイツ放送で聞くことができる。ドイツでまだ知られていない3人の若手芸術家が演奏する。ハンブルク放送管弦楽団の楽譜台に立つのは、1956年に死去した大指揮者エーリヒ・クライバーの息子、カルロス・クライバーである。現在30歳のカルロス・クライバーは、まずはチューリッヒで化学を学び、その後音楽に転向した。ミュンヘンで彼は、ゲルトナー広場劇場で補佐を務めた。彼はそこで学んだことを、その後ポツダムの劇場楽長としての立場にあって、上手く続けることができた。比較的最近にはデュッセルドルフで、ヴェルディの「椿姫」が大成功を収めた。すぐれた天才なのは、さらにスイス人のハインツ・ホリガーである。ベルンの音楽学校で、彼は作曲、ピアノ、オーボエを学んだ。この芸術家は結局オーボエを専攻し、21歳の若さで今日すでに、最も売れている管楽器ソロ奏者の一人である。チェリストのイレーネ・ギューデルもまたベルンで学び、その後パリへ行って、著名なアンドレ・ナヴァラに師事して音楽学校でさらに学んだ。彼女はその楽器を5歳の時から弾いている。コンサートのプログラムは、精選された2つのメニューから成る。1つは、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハの曲から、美しいメロディーのチェロ・コンサートである。もう1つは、ボフスラフ・マルチヌーの曲から、ロマン主義後期の優れたオーボエ・コンサートである。耳を傾けましょう！

★ ★ ★

「耳を傾けよう」

第511号

1959年から1960にかけて、カルロスはコレペティートルから楽長へ飛躍を遂げ、長い間ほぼオペラのみを指揮することになった。

文書で証明された彼の最初のコンサートは12月7日、北ドイツ放送のシリーズ「若者たちの演壇」で開かれた。

C.P.E.バッハのチェロ・コンサートに至るまで、他の作品は残念ながら行方がわからない。テレマンの組曲は、1960年12月1日と2日の選抜されたスタジオ演奏の形で残っている。

テレビ雑誌「耳を傾けよう」は当時、コンサート全体の中継延期を予告した。

このコンサートの録音に関する情報または手掛かりをお持ちの方は、私あて照会されたい。

1974 年、バイロイト

240 ページの補足

1974 年、バイロイト

「トリスタンとイゾルデ」初演の録音およびラジオ中継放送

「フォノフォーラム」のリヒャルト・ハウザーにとって「初演」の評価（「普通」）は、2 回目の上演（「抜群」）よりはるかに低かった。(1) 彼はこの初演が、そのような評価で放送されればと思った。実際に、少なくとも第 1 幕に関してはそうだった。舞台補助パウル・ナハトマンが初演の際、不器用にマイクにぶつかったおかげで、中継放送の邪魔になったのである。この録音は、これを削除しようとするこの技術者の努力を永遠に残すものとなった。ブランゲーネがトリスタンの方へ歩いて行く場面で、道具方が「もっと高く、もっと高く」と叫ぶ声が聞こえ、序曲の終わり頃にはくしゃみが聞こえる。それで初演は霊気の中へ入って行ったのである。第 2 の中継放送をもって、その欠陥は消えることになった。それで第 1 幕は 8 月 2 日にもう一度録音され、先のものとの交換されて放送された。両方の版ともそれと知られずに、初演の海賊版として出回った。

(1) 「クライバーのバイロイトでのトリスタン」「フォノフォーラム」1974 年第 11 号

2008 年、イタリア放送協会

カルロス・クライバーに関するイタリア放送協会の 10 回シリーズ放送

イタリア放送協会のシリーズ放送の中で、2008年にカルロスの姉ヴェロニカ・クライバー、およびクラウディオ・アバド、マウリツィオ・ポリーニが、カルロス・クライバーに関して意見を述べた。

クラウディオ・アバドはクライバーについて、「たぶん」20世紀で最も偉大な指揮者であると言ひ、ヴェロニカ・クライバーは、弟の青少年時代から逸話を2つ語っている。

「幼い頃弟は、あらゆることに対して1つの意見を持っていて、いつもそれを断固として前面に出すのです。1935年ごろ、家族でドイツの湖に水浴に行った時のことです。弟は真っ先に水に近づき、温度を調べてから、家族全員に向かって威厳たっぷりにこう言うのです。「あまりに冷たすぎる！誰も水に入ってはいけない！」

「エーリヒ・クライバーは湖の畔に別荘を借りるのです。客間にピアノがあつて、子どもたちはすぐにピアノを弾き始めるのです。父親はそれを拒否し、ピアノを閉めて、鍵を湖に投げ込むのです。(あるいはひょっとして、そのふりをしただけかもしれません。)」

(これら原文の提供に関して、ジャーナリストのカルロス・ヴィトマン氏に感謝申し上げます。)

イタリア放送協会の寄稿は、同ラジオ放送局のホームページでさらに検索可能である。ここに放送資料およびハイパーリンクを掲載する。

ミラノにおけるカルロス・クライバーとロンドン交響楽団との生中継放送

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの交響曲第7番からの抜粋、スカラ座の記録保管所より、生録音。

第1楽章の結び、第2楽章の初め、および第4楽章全部、約13分。

1981年6月5日ミラノにて、カルロス・クライバーがロンドン交響楽団を指揮する。

(イタリア放送協会のサイトが、移動したか無くなった。入手された方は、私宛て情報をお送りください。)

10 連続のシリーズ

音楽の微笑み： カルロス・クライバーの肖像
アンドレア・オットネッロ

2008年3月1日

(ウェブページを開く)

2008年2月29日

(ウェブページを開く)

2008年2月28日

(ウェブページを開く)

2008年2月27日

(ウェブページを開く)

2008年2月25日

(ウェブページを開く)

2008年2月23日

(ウェブページを開く)

2008年2月22日

(ウェブページを開く)

2008年2月21日

(ウェブページを開く)

2008年2月20日

(ウェブページを開く)

2008年2月18日

(ウェブページを開く)